

富士川義之・結城英雄編  
『亡霊のイギリス文学——豊饒なる空間』  
(国文社、2012年)

---

高 井 美 紀 子

---

本書は、イギリス文学に登場する亡霊について、様々な観点から論じた論文を中世から現代までの5章仕立ての時代別に編纂した画期的なアンソロジーである。

第一章「亡霊の誕生」。河崎征俊「中世における〈死者〉と〈亡霊〉」によれば、中世初期から中期にかけて、亡霊はキリスト教会のもとで一定の抑制を受けていた。しかし、結局は教会も「死者の追想」を完全に押さえ込むことはできず、11世紀過ぎから自伝風の亡霊物語が増大していく。石原孝哉「幽霊伝説から聖者伝説へ」では、中世において幽霊伝説が、物言えぬ庶民による権力者の犯罪告発の側面を持っていたことが指摘される。幽霊となった人物には、非業の死を遂げた人や、権力者によって不当に殺された人が多かった。その中には、庶民の圧倒的人気を得てついにはローマ教会によって聖列され、彼を殺したヘンリー二世を敗北させたカンタベリー大司教トマス・ア・ベケットなどがいた。日本にも怨霊伝説や義経不死伝説などがあり、洋の東西を超えて異なる文化で似た現象が見られるのは興味深い。

第二章「ゴシックの勃興」。18世紀から19世紀前半は、原田範行「〈テロリズム〉を消費する—亡霊騒ぎと十八世紀イギリスの喧噪」で指摘されるように「公共圏」が成立した時代で、それに伴い伝記や小説、ジャーナリズムといった近代

的な言説空間の中に亡霊が登場するようになった。その中で、亡霊は近代社会の成立期の矛盾や誤謬を吸収し、市民によって消費される存在となっていった。進藤桃子「夢か幻か—合理主義者ラドクリフの亡霊」では、合理主義的なラドクリフの「解説付きの超自然」(60)が、20世紀に精神分析によって理論化された心理的オカルト現象と近似しているとの興味深い指摘がなされる。田村斉敏「山上の恐怖—ワーズワス『茨』における質問者の正体」は、ワーズワスの「茨」の恐怖の源泉が、突き詰めれば、マーサの噂の不明瞭性にあると指摘し、この詩が集団的な言語活動から派生したバラッド形式で描かれていることがその不明瞭性の効果を上げていると論じる。藤巻明「一八一六年六月十八日のクリスタベル—バイロン、ハズリット、シェリー」では、詩人シェリーを恐怖のあまり絶叫させた「クリスタベル」の中の魔女ジェラルダインの胸の描写が、どの草稿によるものであったかを検証する。その結果、「無限定による恐怖イメージ」(92)を喚起する力が遙かに強いとして、ジェラルダインが魔女であることを直接的に示す具体的な描写を省いた版の方に軍配が揚げられる。これらロマン主義の二論考からは、恐怖の本質が不明瞭性の中にあり、それを近代的言説空間の中でいかに実現するかということにロマン主義詩人たちが腐心していたことが伺えて刺激的である。

第三章「心霊現象」。ヴィクトリア朝期は心霊主義が大流行した時代であり、本章で取り上げられている作家も心霊主義との関わりを免れ得ていない。富士川義之「ローズの霊に憑かれて—ジョン・ラスキン『クリスマス物語』」では、厳格な福音主義派の英才教育を受け、当初は心霊主義を胡散臭く思っていたラスキンが、恋人ローズの死をきっかけに心霊主義に傾き、怪しげな霊媒師たちの手玉に取られてローズの霊を求めてさまようようになるくんだり語られるが、その様子は滑稽であると同時に切なくロマンチックである。丹治愛「霊の物質化—心霊主義的幽霊物語としての『ドラキュラ』」は、心霊主義について「科学的自然主義が拡大していく時代相のなかで、人間の霊の実在性、および肉体を離れた死後の霊との交信可能性を反時代的に信じる人間観・自然観・世界観」(192)と定義する。川崎明子「科学者が見る幽霊—ディケンズの『憑かれた男』」によれば、心霊主義をまったく信じなかったディケンズの描く幽霊は、当時の科学的ディスコースや進化論的発想を作家が取り入れ文学的想像力の中で発行させて生み出した産物であり、人間的時間を肯定するために現れてくる。ディケンズの幽霊とは、いわばその超自然の力を媒介に人間に助力を与える存在なのだ。森松健介「詩人ハーディと幽霊」においても、ハーディが

幽霊の存在を否定しながらもそれを見る願望を捨てきれずに、その詩の中に幽霊を描き続けたことが詳述される。いずれにせよ、ヴィクトリア朝期の幽霊は、人間によってその出現を心待ちにされる存在であった。その背後には物質文明や科学的自然主義の隆盛がある。

第四章「モダニズムの亡霊」。この章に含まれる6編の論文のうち3編がアイルランド作家を扱う。結城英雄「『ユリシーズ』における幽霊たち」は、ジョイスが精神分析を嫌悪しながらも、個人や国民の意識の分析には大いに関心を寄せ、心理的な葛藤から発現する亡霊を描いたと論じる。夏目博明「死者が近づく夜—ケルト文化とジェームズ・ジョイスの『土』」で述べられるように、アイルランドには死者に対する独特の文化があった。その土着の幽霊が近代的な作家の自意識や無意識と結びつく所に、モダニズム期のアイルランド文学の特徴がある。民族主義の高揚のもと、個人の意識と民族や社会の意識の狭間で苦悩する作家の葛藤が幽霊という形で表象されるのだ。一方、田尻芳樹「『チルダマス』における亡霊／映画／存在論」は、映画という新興メディアが存在論、認識論に与えたインパクトという観点からウィンダム・ルイスの『チルダマス』を論じる。写真や蓄音機、電話、映画のような「不在を現前化させる」(287)テクノロジーは、現実世界を非現実化し我々を幽霊的な存在にするという、現代社会にそのまま通じる指摘がなされる興味深い論考だ。同じく登場人物が亡霊化するという観点から、松本朗「亡霊を書くウルフ？亡霊化するウルフ？—くり返すポスト・フェミニズム」で、20世紀初頭の第一波フェミニズムの亡霊としての『ダロウェイ夫人』におけるミス・キルマンの姿が提示される。亡霊は、この世界に実質的な居場所をなくした人、実在感を持ってない人の表象でもある。

第五章「第二次大戦後から現代に至る亡霊」における現代の亡霊は、みな時間に関わりを持つ。亡霊という存在がそもそも超時間的な存在なのだが、第二次大戦後の作家は、亡霊のこの時間を超越するという性質に特に意識的であるように思われる。桃尾美佳「まなざしへの偏見—ジョン・バンヴィル『立証文書』に見る亡霊召喚」では、「あらゆる小説は、すでに失われた時間を再現する試みの産物で(…)小説はおしなべて亡霊的要素を持っていることになる」(361)と述べられる。亡霊を語ること、描くことが、失われた時間や人間を再現する人間の根源的な欲求に基づくものであるとしたら、この先どれほど時代を経ても亡霊は決していなくならないだろう。奥田良二「シェイマス・ヒーニーの巡礼—『ステーション島』における亡霊たちとの対話」は、詩人ヒーニーが生前

アイルランドに関係を持っていた亡霊たちと対話しながら自己の生の在り方を探っていると論じる。現代の作家は亡霊とともに未来を構築していく。凄まじい速さで変化する現代という時代において、亡霊は、忘れてはならない時間と記憶の象徴なのだ。

亡霊は、ありとあらゆるイギリス文学の中に登場する。ディケンズの小説やゴシック小説の幽霊は有名であるが、近代小説が誕生する遥か以前から亡霊たちは民話や伝説など、社会の様々な言説空間の中に住み続けてきた。亡霊を研究することによって、社会や人間の心が見えてくる。本書は単なる文学における亡霊というテーマを超えて、優れた社会史研究、文化史研究の見本を提示しており、文学研究者だけでなくこれらの隣接分野に関心がある人が読んでも面白く有益な読み物となっている。紙面の都合上触れることのできなかつた本書のすべての論文が知的興奮を喚起する刺激に満ちていて、ここで紹介できないのが残念である。ぜひとも本書を一読して欲しい。